



# 新たな学修と資質と能力

—時代は新しい力を求めている—

## 1 はじめに

新学習指導要領（2017.3告示）では、学力に変わり資質・能力の言葉が使われている。未来を自らの力で切り拓く力の育成である。基礎的な知識や技能を能力として定着させることで、思考力・判断力・表現力の育成につ

ながる。これからの社会は、受信、発信、受発信を能力として求める社会になる。

ハーバード大学の調査（1979）によると、人間には7種類の能力があり、1.人間関係における察知力 2.内省能力 3.空間的察知力 4.身体的能力 5.サウンド、音楽的能力 6.言葉の能力 7.数学的、論理的能力があげられている。

JPPA（日本Potential Profiling協会）は、ハーバー

ド大学の調査をもとに1.言語能力、2.論理数学的能力、3.空間認識能力、4.音感能力、5.身体感覚能力、6.人間関係形成能力、7.自己観察能力（「才能と天職について」2010.6）に分け、能力の高さによって職の分類をしている。これらの能力はすべての人に備わっておりどれも高められるという。

産業界は「課題を自ら働きかけて見つけ、自分で考え判断しながら主体的に取り組み続け、チームとして共同して確実に解決していく能力」（経済産業省2011.3）を持つ人材、人間性としての資質を充分保持した人材を欲している。この能力は教育によって育成されることから、主体性を持たせる21世紀型学習としてActive Learningを含む指導が学修者に適していると解釈されている。

今回は、このような背景を踏まえ資質能力の育成が重視される理由をActive Learningを取り入れた学修において、学生の学修方法の変化や習得結果等に触れた考察を行う。

## 2 資質・能力の育成が重視される理由

### 2-1. 30年後に必要な能力とは何か？

30年後は汎用性<sup>(註1)</sup>の高い能力が求められ（ベネッセ総合研究所2016）、基礎学力・知識・技能の他に情報活用能力といった高度な資質・能力が必要とされる。リーダーシップや責任感、共有・協働、論理性やプレゼンテーション能力により、付加価値を生み出し社会の成長・発展につなげる能力が必要とされる。

すでに、技術革新を原因とした10年後に存在しなくなる職業の予測<sup>(註2)</sup>も発表されている。産業界<sup>(註3)</sup>は、「産業界の求める人材像と大学への期待」の中で「アクティブ・ラーニングの導入によるコミュニケーション能力の向上」「さまざまな社会活動体験の増加・留学、インターンシップ、ボランティア」「学生の能動的な学びによる学修時間の拡充」を大学教育に対して求めるメッセージを発信した。

経済産業省はすでに「社会人基礎力」を定義<sup>(註4)</sup>し、

未来の人材に必要な保持能力の重要性を発信している。また、経済同友会は、「企業の採用と教育に関するアンケート調査結果（2010.12）」を発表している。企業が求める資質は、1位.意欲・食欲、2位.行動力・実行力、3位.協調性、4位.論理的思考力、5位.問題解決力、6位.新しい知識能力への意欲、7位.表現力・プレゼンテーション力、8位.専門知識・研究内容、9位.創造性、10位.課題発見力と続くことから、企業は「論理的に考え行動することができる」「問題解決力がある」人材を望んでいることがわかる。

就学後の社会進出は自己と企業との関わりになる。企業が求めるのは、資質を自ら成長できる人間性と人格、そして現実要求の対応能力である。人は生来「素質と資質と能力」（「実践企業人材論」渡辺）をもっており、能力の発揮は資質次第になる。そのための資質の向上は欠かせない。グローバル時代が要求する人材は、いかにリーダーシップを取れるかが望まれる。社会が求める能力は企業観と一致している。冒頭であげたJPPAは、高言語能力者に新聞記者、作家、詩人、高論理数学的能力に科学者、会計士、プログラマー、高空間認識能力に建築家、写真家、画家、高音感能力に音楽家、高身体感覚能力に運動選手、職人、外科医、高人間関係形成能力に涉外、教師、管理職、接客係、高自己観察能力に起業家、カウンセラー、という職の分類をあげている。これらの職種は高い能力を必要とする職業であり、社会や企業は今後高能力・高資質を保有した人材を示唆している。

21世紀型スキルは科学的知識が必要とされ、情報化の進展はグローバル化によりグローバル市民として必要な責任感が求められ役割を果たしていく時代に相応しいスキルとして構築されたものである。2009年の白書では、「思考の方法、働く方法、働くためのツール、世界の中で生きる」の構成要素を知識（Knowledge）技能（Skills）態度（Attitude）価値（Values）倫理（Ethics）であると提示した。なかでも、思考の方法に関する能力は教育で育成するとし、社会から求められる知力・人間力の育成にラーニングプログレッションズ（Learning Progressions）の導入や国際バカロレア・全人教育やリベラル・アーツ教育が賛同されている。

## 2-2. 海外における資質・能力の教育

OECD、EU、イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、アメリカなどの国<sup>(註5)</sup>が資質・能力に関わる教育目標と要素をかかげているように、近年、海外の教育のあり方に大きな影響を与えているのが、資質・能力の教育と評価である。基礎的リテラシー、認知スキル、社会スキルはこれからのグローバル社会において欠かせない三要素であり、共有の重要性を含め世界約10カ国で具体的な教育課程の在り方が考えられており、市民教育やキャリア教育、ESDなどで実践されている。

OECDが提唱するコンピテンシーの定義である「社会生活において人が本来もっている知識をどれだけ実際に行動に移して活用していくことができるかの力」は能動的な学修の中で構築できる。資質・能力は目的や手段に使うことで思考の新構築に重要となり、社会や世界の人々と強調、協働、共生、感性を育てる教育が21世紀に求められる資質・能力の育成であるからだ。

学びの質の向上には、教育内容と学習活動と資質・能力を一体化させた学習が必要であり、Active Learningを含めた学習過程を展開していく学修が望まれる。学修は、資質・能力で内容を学び深めることを目的とした学びである。資質は生まれ持った才能であり、能力は努力して身につけた力であり、知識とは学んで身につけていくものである。

21世紀に求められる資質・能力は、実践力、思考力、基礎力、そして理解力・伝達力・発展力を必要とし、相互関係は共感と共有が構築されることでコミュニケーション能力を強化し合意と解決を導き出すものである。創造的思考力は21世紀型スキルの高度知的スキルといわれ、グローバル世界・社会に相応しい学びや修得を社会から要求されている。

情報共有時代を迎えた21世紀は、思考力・判断力を問われ近未来への影響を直接受ける時代となる。2020年に実施される「大学共通テスト」に始まり、学力の3要素を基礎に大学入試が変わっていく。主体的な活動から共有、協働、そして総合的に捉え、論理的思考、論拠の提示等の能力を強く求められることになる。そのため学習スタイルとして取り上げられているのが、Active Learning、PBL、PIL、双方向性・対話型授業、ICT授

業、IBプログラムという世界標準の教育である。大学が求める入学者はActive Learningによって自分の考えをいかにより良く表現できるかを育成された能力を持つ人材である。高校では小論文や面接、プレゼンテーション等で行う能力評価はトップ校（AERA2017.6.5.No.25）が先進的に導入をしている。

30年後を見据えた生き方につなげるために、Active Learningの目的は汎用的能力の育成であり、Active Learningの意義はここまで述べてきたような社会からの要請、時代の要請による新たな汎用的能力の習得である。21世紀に求められる資質・能力の育成のためにActive Learningを含めた学修が必要といえる。

## 2-3. どのように学ぶのか

知識社会はこの10年間で変化を見せている(Buckingham and Willett.2006)。知識構築環境(knowledge of new competencies)の重視は、情報の伝達や共有と環境適応によって異なる。未来はAIを活用した協働社会になる。そのためのスキルを身につけることを目的とした学校がある。出版業界のAERAは、①テクノロジーを開発、また使いこなすためのIT・サイエンスの素養、②AIにはできない、解くべく課題を発見し、探求する思考力・問題解決力、③多様なプロジェクトで他者と協働できるコラボレーション、④グローバルなコミュニケーション力の4項目を満たしたAI協働で変わるスキル導入中高一貫校・高校30校を調査（アエラ2017.6.5.No.25）している。AERAの調査校によると主にIB(International Baccalaureate)、SSH(Super Science High School、SGH(Super Global High school)などを導入しグローバルリーダーやリーダーシップを担える人材の育成に力を入れていることがわかる。IBプログラムは10の人物像を持ち、国際的な視野をもつ人間の育成を目的としたもので、現在、国際バカロレアの認定を受けている学校は、世界140以上の国・地域において4,846校(2017.6.1.現在)、その内日本では20校が認定されている。

グローバルリーダーに必要な資質は、NEW WHITE PAPER<sup>(註6)</sup>によれば人間的資質・価値観・文化的素養・企業での経験の主要4領域で、人間的資質は外向性・同調性・誠実さ・感情の安定・経験への開放性が5大要素



としてあげられている。

これから求められる人材・事象解決の基礎力には、社会と世界に関わるための自律的活動力、自他理解、文化理解・社会倫理、ビジョン形成、学習観が含まれる。何を理解し、何ができるかを見据えると、ベネッセ教育総合研究所においては「コラボレーション力、創造的・批判的思考力、学び方が思考力・判断力・表現力」(ac.2017.12) 等であると提唱している。数理的思考や情報活用能力、英語での発信力は将来力として必要な能力となる。学修者が特性を生かし、目的やビジョンの構築をする未来がやって来る。2045年は労働の転機時代といわれ、コンピュータ能力技術が人間の能力を上回る。グローバル化は能力の変容と教育の変容を求めている。

新学習指導要領は、主体的・対話的で深い学び(Active Learning)を重視している。共働は社会問題の解決や自己形成につながる。その学びの方法として「主体的・協働的に学ぶ学習(Active Learning)」があげられる。能動的学修の過程は「①知識及び技能の修得、②思考力・判断力・表現力の育成、③学びに向かう力、人間性等の涵養といった資質・能力(新要領)が培われ、自己変容へとつながる」<sup>(註7)</sup>。資質・能力の育成は情報活用能力を基盤とするActive Learningが適応すると考えられている。Active Learningの定義は、「学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成」である。社会変動に主体的に立ち向かえる人材育成といえる。

大学では資質、能力の育成のために、意見発表(プレゼンテーション)、討論・話し合い(ディベート、ディスカッション、ネゴシエーション)、課題学習、事例研究、ボランティア、インターンシップ、実践と失敗を経験する体験活動などの学習・指導方法が積極的に導入されている。小・中・高等学校においてもActive Learningの導入は確実に広がっている。ESD(Education for Sustainable Development)教育も推進され、2020年オリンピック・パラリンピック東京大会の準備としても考えられている。

### 3 情報の共有・協働・共働を取り入れた授業

大学はグローバル人材の育成に伴い、グループ学修、プレゼンテーション、長期学外学修プログラムなど、学生が主体的に行動し、知識をいかす実践型・体験型の教育に変わりつつある。ICT活用における情報活用能力の育成や反転授業や協働学習、個々の学習データ分析に基づく個別学習などの導入も増している。

大学から授業展開に取り入れてほしい「能動的学修を促し思考力を高める工夫を取り入れた授業法・学習法の例1」「能動的学修を促し思考力を高める工夫を取り入れた授業法・学習法の例2」資料が筆者にも配布された。具体的には、次のような計16項目の教授法や学習法が記載されている。「能動的学修を促し思考力を高める工夫を取り入れた授業法・学習法の例1」では、①発問・応答・挙手を求める。②コメント・質問の提出および回答。③小テストや小レポートの実施とフィードバック。④クリッカー/タブレット等を利用した意見共有。⑤授業内独自アンケートの実施。⑥反転授業。⑦予習・復習課題/調査研究。⑧ディスカッション/ディベートとあり、「能動的学修を促し思考力を高める工夫を取り入れた授業法・学習法の例2」では、⑨グループ討議/グループワーク。⑩プレゼンテーション/ポスターセッション。⑪フィールドワーク。⑫課題解決型学習(PBL)。⑬サービ斯拉ーニング。⑭リアル教材。⑮ロールプレイ/シミュレーション。⑯実験/実習/実技とある。

以下に紹介する筆者の演習は、上記の項目を取り入れActive Learningを踏まえ反転授業を試み、授業と並行に別に自主学習期間を設けて行ったものである。授業展開は3パターンあり、以下で紹介する「授業パターン」の通りである。問題解決方法を3通り実施し、学生の学修成果と学力(能力)の向上が図れたかを考察した。対象の授業は、都内一私立大学が開講する司書教諭課程の5科目のうち筆者が担当する3科目である。

情報活用プロセスとして、1.テーマの設定 2.情報探索方略 3.情報探索と収集 4.情報・資料の活用 5.まとめと伝達・保存 6.プレゼンテーションの過程・内

容・発表の総合評価の6段階にそれぞれ、目標とする能力、指導内容、学生の修得の期待、支援・指導方法、コンピュータ活用のねらい、等を設定し、自宅学修（反転）の方法を取り入れ、知識の構築と横断的な思索を基に、質疑に充分応答できる力の育成を考慮した。

評価は評価シートを作成し、相互評価方法とした。目的は、他学生の評価に値する力が各自に備わっていると認識した上での評価である。責任の認知度は必然的に高くなる。筆者は、学生の評価シートをもとに学生の評価の妥当性を含めた演習評価を行う。一人一人の学生が問題に対する社会への認知度や認識、情報の有無、深層思考による判断など、多くの判断材料が1枚の評価シートに凝縮している。人数については、他学科の授業参加を加えている。

授業パターン1は、科目「学習指導と学校図書館」の演習、人数19名である。この演習の目的は、自身の身近な範囲で抱えている自身の解決したい課題をテーマとして取り上げ、自らが納得できる情報収集を経て、日本の社会現象を見極め、日本の社会的な見解や判断を根底に、取り上げたテーマが海外ではどのように捉えられており、国内外での影響や解決方法の差異等の自主学修を行えるか。を考慮したものである。例えば、「生命倫理から見た生と死」であれば、生命倫理の世界観・日本観、生命倫理の道徳的・排他的な捉え方、日本と世界の死生観などを自身で構築する。

授業パターン2は、科目「学習指導と学校図書館」の演習、人数25名である。この演習の目的は、自身が他学生との討論で解決したい課題をテーマとして取り上げ、自らが納得できる情報収集を経て、日本の社会現象を見極め、日本の社会的な見解や判断を根底に、取り上げたテーマが海外ではどのように捉えられており、国内外での影響や解決方法の差異等の自主学修を行えるか。を考慮したものである。例えば、「セクシャルマイノリティ教育の必要性」であれば、教育界・教育現場での世界観・日本観、セクシャルマイノリティに対する道徳的・排他的な捉え方、日本と世界の教育観・価値観の違いを自身で構築する。

授業パターン3は、科目「読書と豊かな人間性」の演習、人数32名である。この演習の目的は、「命」を課題

としたものである。課題に見合った自らが納得できる情報収集を経て、日本の社会現象を見極め、日本の社会的な見解や判断を根底に、取り上げたテーマが海外ではどのように捉えられており、国内外での影響や解決方法の差異等の自主学修を行えるか。を考慮したものである。例えば、「命」の尊厳の範囲（人間、動物など）はどこまで可能か。虐待、殺人、殺傷、殺処分、衣食住、愛など乳幼児・子供と動物への価値観の差異、外国での動物に対する動物愛護条例制度の成立の強化国など、世界観・日本観、道徳的・排他的な捉え方と日本と世界の教育観・価値観の違いを自身で構築する。

評価項目は、行っている問題解決方法のパターンが異なるため、それぞれ設定した。評価は評価シートを作成し、学生に行わせた。

パターン1は、課題選択、テーマ設定、情報探索の計画、情報・資料の探索と収集、情報・資料の活用、個人学習、自宅学習（反転授業）、グループ学習、意見交換、発表、質疑応答を展開し、学修活動の評価に至る。といった内容の評価シートとした。

パターン2は、課題選択、テーマ設定、情報探索の計画、情報・資料の探索と収集、情報・資料の活用、個人学習、自宅学習（反転授業）、グループ学習、意見交換、発表、質疑応答を展開し、学修活動の評価に至る。といった内容の評価シートとした。

パターン3はテキストを使用し、課題選択、テーマ設定はあらかじめ教員が準備した。学生は、情報探索の計画、情報・資料の探索と収集、情報・資料の活用、個人学習、自宅学習（反転授業）、グループ学習、意見交換を展開し、学修活動の評価に至る。といった内容の評価シートとした。

パターン1 評価項目 1.①テーマが内容を明確に表しているか。②問題意識が明確か。③本論の構成にまとまりがあるか。④自分の言葉で表現しているか。⑤自分の意見が明確に述べられているか。⑥聞きやすい工夫がなされていたか。⑦コピー添付資料の典拠が明らかか。⑧多くの資料を有効に利用しているか。⑨わかりやすい内容か。⑩全体の構成に工夫していたか。2.発表時に気づいた点、問題点、留意点。3.総合評価。4.授業企画の賛否。

パターン2 評価項目 1.①印象深い質問の有無。②考え方の比較。③積極的に取り組めたか。④事前準備に費やした時間。⑤意見交換には何が（例・事前調査、深い知識など）必要か？⑥現存知識の力不足はなかったか。⑦多知識発信と現状知識発信の違いはあるか。2.授業企画の賛・否。

パターン3 評価項目 1.①命を生きることをどう捉えたか。②印象深い質問の有無。③考え方の比較。④積極的に取り組めたか。⑤事前学修（反転）に費やした時間。⑥意見交換には何が（例・事前調査、深い知識など）必要か？⑦現存知識の力不足はなかったか。⑧多知識発信と現状知識発信の違いはあるか。2.授業企画の

賛・否。

以上に挙げたパターンごとの評価により、発表者の自主学修の動向と課題が見える。ただし、ここでは項目ごとの紹介ではなく総合的な評価、課題、学修効果を紹介する。なお、ここまで述べてきた概要については表1に示す。

まず総合的な評価である。パターン1は、資料の見せ方がうまくとても分かりやすい。内容は難しいが資料と具体例が豊富であり効果的。導入がとても上手。様々な問題を通して考えさせる発表。資料収集、資料作成に力が入った細かい説明。典拠の記載が明確で根拠があり納得できる内容。Presentation、ユーモアを含む話し方

表1 各パターンの概要と学生による評価

	パターン1	パターン2	パターン3
課題	各自でテーマ設定を行う	各自でテーマ設定を行う	Text使用
テーマ	各自で設定したテーマ (生命倫理から見た生と死、愛、噴火、「本」の歴史、などの多様なテーマ)	セクシャルマイノリティ教育の必要性	命
テーマ 選択方法	自己選択	各自テーマとテーマ選択の理由レポートを提出し、授業内で紹介。説得効果の結果によりテーマを決定する。履修者全員の模擬発表後にテーマを設定	テーマ・討論小テーマは教員が設定
学修方法	課題選択からテーマ設定、情報探索の計画、情報・資料の探索と収集、情報・資料の活用、個人学修、自宅学修（反転授業）、グループ学修、発表、質疑応答	課題選択からテーマ設定、情報探索の計画、情報・資料の探索と収集、情報・資料の活用、個人学修、自宅学修（反転授業）、グループ学修、討論	課題・テーマによる情報探索の計画、情報・資料の探索と収集、情報・資料の活用、個人学修、自宅学修（反転授業）、グループ学修、討論
資料収集	インターネット・本・新聞・雑誌・リーフレット・テレビ	インターネット・本・新聞・テレビ	インターネット・本・新聞・雑誌・リーフレット
質問受付	授業内・授業外	授業内・授業外	授業内・授業外
自主学修期間	授業外3か月	授業外14日（2週間）	授業外14日（2週間）
評価表	有（学生相互に行う）	有（学生相互に行う）	有（学生相互に行う）
発表方法	PowerPointで各25～30分	ハシリテーターが全意見を板書。	討論
意見交換	1テーマ平均15分	180分	180分
積極的意欲的態度	学生自身の自己評価では「大いに取り組めた」	学生自身の自己評価では「大いに取り組めた」	学生自身の自己評価では「大いに取り組めた」
評価表(期限)	有（1週間後提出）/評価理由記載	有（1週間後提出）	有（1週間後提出）
授業企画賛否	学生による評価、演習企画に対する評価は大賛成。「何度でもやりたい」等	学生による評価、演習企画に対する評価は大賛成。「何度でもやりたい」等	学生による評価、演習企画に対する評価は大賛成。「何度でもやりたい」等

は好印象のため内容にも楽しさが増加。しっかりと目線を向けた発表は発表内容に引き込みやすいいい Presentation。グラフや用例、補足等は効果的。深い考察を認められた。研究意欲が認められた。パターン 2 は、数多くの事例の収集に時間を費やした。疑問的な文章の理解を率先して行った。パターン 3 は、他の人の考えを知るためには分析力が必要と痛感。討論中は、自らの意見を他者が理解できるように考えをまとめ伝える努力をした。他者の意見を聞き、自分の意見を改めて見直し、考え直すことをした。積極的に発言できたが、他者の意見を聞きながら自分の意見を発言することは案外難しい。司会時は積極的に話を進めるように意見を聞いたが、逆に自主性をもって発言する機会を失くしてしまった。言いたいことを端的にまとめる必要がある。

次に、学修成果である。パターン 1 は、意識的に考えることの大切さや善悪を知ることの重要性を学んだ。現代の社会問題を考えられる内容に刺激された。専門性が高い発表は刺激が多い。事前知識や常日頃から疑問を持ち考えていなければ意見交換は出来ない。当日他人の意見に関しても疑問に思う心を持たなければ、深い議論はできない。どのような意見も受容する心は、自身の意見の幅を狭める。

パターン 2 は、実存的問題に対して様々な観点から意見交換ができた。哲学的な発問や議論の方向を体験できた。個人の感性について重点的に話せた。知識量が多いと理解の深度につながり、興味関心の強さが知識量を増加させ、意見交換を発展的に導ける。知識量の容積の増加は説得力がある。

パターン 3 は、自身との考えの違いを直接討論できることをはじめ、テキストの内容を考えるだけでなく、現代の教育問題について考慮し体験に基づいて考えることができた深い時間だった。大学の授業の中で充実した貴重な時間を得られた。生きるとは何か、教育とは何かを考えさせられる時間だった。豊かな心を持ち、ものごとに挑戦し生きていきたいと Active Learning は教えてくれた。現代社会の親子関係に信頼関係がなくなっていると考えていたが、信頼されるという観点から重要性を考えられた。面と向かってコミュニケーションを取ることは非常に大事だと改めて感じた。自分以外の参加者の

考えを知ることで新たな発見ができる。この授業を通して、伝える・伝わることの重要性和コミュニケーションのあり方を学んだ。同じテキストを読破したからと言って全員が同じ感想を持つわけではないと改めて気づかされた。自身、一つの方向からしか物事を見ていなかったかを思い知らされた。自身は文面をただ読むことしかできなかったが、自分の専攻内容に絡めて考えたり、社会問題の事象に絡めたり、ものの見方や考え方に決まりはなく自由に考えて良いと言うことを学んだ。自身の考えの浅さを知ることになった。問題を捉えるにあたりテーマを掘り下げるのが弱かったと感じた。他者の意見により自身で考えるだけでは思いつかないことに気づかされた。想像をめぐらすことでさまざまなことを読み取る必要を感じた。意見交換により成長できると確信した。社会で必要とされる要素を身に付け鍛えることの重要性を学んだ。2つの考えの変化があった。一つは「時間」である。「時間」というものは必ずしも確定的ではないということ。二つ目は「理解」である。伝えることの難しさ、重要性を学び、姿勢を示し、どう伝えるかである。本を読んで自身の意見を持つことはあっても、それを共有し、自身の意見と併せて吟味し、より深い意見を作り上げていくことはなかった。今回自身の視野を広げ、他者の意見を合わせ1つの答えを作り上げて行く貴重な体験だった。今後は、自身で課題を設定し解決をすることの繰り返しを学修できた。社会が求める能力である。自身の世界観をより拡大できることを学修した。人間関係や生物に対する考えを多様な分野から結び付け率直な意見交換により、新しい見方や考え方、認識、理解の幅が拡大した。現代社会から求められる能力に等しい。自身の学修欲望が満たされた時間だった。他者の意見は深い内容で現状の自分では追いつけない話があり戸惑いを感じた。自分では考えつかなかった側面から質問を解釈しているものが意外と多く、様々な視点から問題を捉えることができた。

最後に課題である。パターン 1 は、発表時の話すスピードの速・遅が目立った。参考文献はポイントごとに紹介する。もっと色や動きのあるスライドが良い。スライド作成に工夫が必要。作成文章をそのまま読んでいたことが気になった。PowerPoint より、SmartArt や



Animationを使用した方が、より鮮明。発表者の問いかけが内容に引きつけるには重要である。内容の明確さが重要である。資料が少ない場合の発表には注意が必要。問題点を明確にする努力が必要。予備知識の重要性を痛感した。テーマは発表内容そのものであるため予めテーマは絞り込む必要がある。問題意識・問題提起は自己意識につながる。インターネットに頼りがち。自身で直接資料収集し適切な資料の選択、探求することが重要。

パターン2は、時事的なデータと理論の不足を痛感した。討論で知識やものの捉え方、深い考えを持ち発言する同年代の学生に比べ自らの浅知識を痛感し、以後の学習姿勢に反省を生かしたい。事前知識・深い知識・教育学の知識・考えのまとめが重要だ。理由としては、事前理解は発展的になる。ハシリテーターの知識の問題がある。積極的な態度はよりコミュニケーションを増す。情報の出典が少ない。知識に意見を加えることが理論的会話を生む。浅い知識を痛感。科学的教育方法や学習指導要領の理解不足であった。

パターン3は、事前知識や常日頃から疑問を持ち考えていなければ意見交換は出来ない。当日他人の意見に関しても疑問に思う心を持たなければ、深い議論はできない。どのような意見も受容する心は、自身の意見の幅を狭める。先を見据えることの出来ない愚かさ、衝動を抑えることのできない愚かさがある。知っていることでしか話せなかったり、範囲が決まっていたりするので力不足を感じた。知っている範囲だけでは限界があり、話をうまく広げることが出来ない。知っている範囲では物足りず、他の人に迷惑をかけるのではないかと力不足を感じた。事前準備で知識不足を補えたら良かった。日ごろの経験や体験の重要性を感じた。個々人の話を聞きながら意見をまとめる力が不足。自身のテーマに対する解答の浅さが原因であり、想像性が弱かった。

## 4 おわりに

21年に開始される共通テスト試行調査問題が公表（朝日新聞2017.12.5）され、センター試験の出題傾向が変わ

る。思考調査は、新指導要領の知識をもとにした思考力・判断力・表現力を意識して作成されたものである。学んだことを日常生活に生かす、考えながら知識を活用することを重視した内容だ。試験経験者からは、今の授業のままでは解けないという声も上がったという。知識の柱が何本も縦に伸びても問題解決にはならない。横断的思考と横断的つながりが容易にできなければ解答はもとより、問題解決の方法さえ見つからない。考える力を測る（読売新聞2017.12.5）問題に対して、ものを考える生徒の育成に取りかかかなければならない。

Active Learning方式の授業展開は繰り返し行わなければ、学力・能力として定着しないと執者は考えている。現状の授業のあり方では、Active Learningを繰り返し展開するには授業数も足りない。一度きりで備わる力ではないからだ。限界のある時間でどのような能力を付けさせたいのか、どのような能力を修得させたいのかによって、授業内容も、自宅学修（反転授業）も変えて行かなければならない。

上記の授業展開により得られた能力の実感を学生はこう記述する。

情報検索能力、正確な情報提供能力、文章の構成力、課題解決能力の構築ができた。インターネットは速報性があるが専門的な内容は本が勝る。情報収集後、情報の取捨選択能力が構築される。意見交換のための資料収集、資料選択、情報の比較、記録、要約、評価、まとめるといった一連はメディア活用能力の蓄積となった。豊かな心を持ち、ものごとに挑戦し生きていきたいとActive Learningは教えてくれた。

一つの方角からしか物事を見ていなかったかを思い知らされた。文面をただ読むことしかできなかったが、自分の専攻内容に絡めて考えたり、社会問題の事象に絡めたり、ものの見方や考え方に決まりはなく自由に考えて良いということを学んだ。

社会で必要とされる要素を身に付け鍛えることの重要性を学んだ。伝えることの難しさ、重要性を学び、姿勢を示し、どう伝えるかである。今回自身の視野を広げ、他者の意見を合わせ1つの答えを作り上げて行く貴重な体験だった。今後は、自身で課題



を設定し解決をすることの繰り返しを学修できた。社会が求める能力である。自身の世界観をより拡大できることを学修した。人間関係や生物に対する考えを多様な分野から結び付け率直な意見交換により、新しい見方や考え方、認識、理解の幅が拡大した。現代社会から求められる能力に等しい。自身の学修欲望が満たされた時間だった。

事前調査、知識、自分自身の意見、聞く力などの力がついた。深い知識の必要性を強く感じた。深い知識がないと意見交換にならない。事前に議題について熟考し、自分の考えを深め確立させておく必要がある。他の人の意見にどれほど耳を傾けられるかが大切。一度自分の中で受け止め、さらに議論を深めて行くことが質の高い話し合いになる。自分の意見だけ発信し続けるのは「話し合い」ではないと感じた。事前調査の重要性を感じた。知識を含め事前テーマに対しての意見をただ考えるだけでなく多方面から深く考えておく必要がある。事前の準備と発言の積極生、聞く力、ハシリテーターによる聞き方が重要。事前課題をしっかりとやってくる、積極性、広い視野が必要。

事前調査により問題をかみ砕いて認識できる。知識を得ることの重要性を知っている人は理解度も大きい。知識の多さは自分の意見に絶対的な自信をつける。議論の質が高まる。現状知識だけでは自分の根拠の弱さなどに自信を無くしがちだ。知識が多ければ説得力がある。現状知識での意見交換では到達度は低い。うわべだけで深い部分まで話すことは不可能に近く、話し合いも満足できないで終わる。事前に調べるによりさまざまな意見交換ができより深い内容を得られる。日ごろから多くのことに目を向け興味を持つことが必要。この授業の取り組みは視野や価値観の拡大につながり、以後の学修にもかなりの影響を及ぼすと実感した。

育成すべき資質・能力とは、基礎的な知識及び技能を修得させることである。何かを得るためには得るための能力を得なくてはならない。資質・能力を有するのは学修者も教授者も同様である。未知の扉を開けるのは自分である。

## 註

1. コミュニケーション能力（特に聞く力）・粘り強さ（ディシプリン－鍛錬－に通ずる）、我慢（継続）・自ら課題を発見し、解決を図る力、自ら目標を立て、行動する力・変化や未知の問題への対応力・仲良くする能力（協調性）・論理的な思考力・段取りを組んで取り組む力。（VIEW21.Vol.4.ベネッセ総合研究所 2016.）
2. 「The Future of Employment（雇用の未来）」オックスフォード大学カールフレイ他 2013.
3. 日本経済団体連合会（経団連）経済同友会平成27年4月2日
4. 「資質・能力を育成する教育課程のあり方に関する研究報告書1—諸外国やプロジェクトの資質・能力に関わる教育目標」代表:高口務 国立教育政策研究所 2015
5. 経済協力開発機構（OECD）実施「国際教員指導環境調査・34か国・地域」2013
6. NEW WHITE PAPER.CONSISTENCY OF TRAINING. Building a Global Leader Pipeline. How do Global Leader Develop? DOWNLOAD.2012.1.5.
7. 経済同友会2010年12月22日「企業の採用と教育に関するアンケート調査結果（2010年調査）」<http://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2010/pdf/101222a...>

## 参考文献・図書

- ・『はじめての人のためのアクティブ・ラーニングへの近道』三崎隆著 大学教育出版 2016.10
- ・『時代に挑む中高 学校ルポ』アエラ 2017.6.5
- ・「主体的・対話的で深い学び」を支える学校図書館—「学び方の学び」「読」を通して 渡邊重夫執 学校図書館 全国SLA 2017.6
- ・「次期学習指導要領の理念具現化に貢献する学校図書館（鎌田和宏）学校図書館 全国SLA 2017.6
- ・『高校生のための東大授業ライブ』東京大学教養学部編 2015.7.
- ・『21世紀型スキルー学びと評価の新たなカタチ』P.グリフィン他共著 北大路書房
- ・『高大接続改革—変わる入試と教育システム』山内太一／本間正人著 ちくま新書 2016.10
- ・『IB教育がやってくる！—「国際バカロレア」が変える教育と日本の未来』江里口歎人著 松柏社
- ・実践企業人材論 VOL-3『人間の形成と富の形成』“人格と人間性の違い”ラポールグループ 代表 渡辺 孝雄
- ・「資料7.基礎的・汎用的能力の明確化と、その育成について」文部科学省生涯学習政策局政策課 2017.9 ac.